54　第一次世界大戦における病院船「八幡丸」の医療活動

柳川　錬平[1,2]，澤井　　直[1]，坂井　建雄[1]
[1] 順天堂大学医学部 解剖学・生体構造科学，[2] 防衛医科大学校 防衛医学講座

日本は明治維新以後，日清，日露，日独戦役（第一次世界大戦）と10年毎に戦役を経験してきた．参戦の都度，日本海軍は民間貨客船を徴用することで病院船を確保した．日清戦役では神戸丸1隻が，日露戦役では神戸丸に西京丸を加えた2隻が，日独戦役では八幡丸1隻が，それぞれ日本郵船から徴用された．その後も昭和二年支那騒乱事件では笠戸丸（大阪商船）が，先の大戦では朝日丸（近海郵船）など8隻が海軍病院船として徴用され，それぞれ戦地から内地に至る医療の一端を担ってきた．

日清戦役，日露戦役，および支那事変以降に関する多くの史料が公開され，神戸丸，西京丸，および朝日丸以降の海軍病院船については比較的細部まで解明されている一方で，日独戦役における病院船の活動についての史料は少ない．八幡丸の行動が注目された形跡も乏しく，小池らが「海軍医務衛生史」（昭和61年，柳原書店刊）で紹介した元八幡丸乗組軍医の追憶談を超える叙述は，日独開戦100周年を迎える現在まで公表されていない．本発表では，大正7年に海軍軍令部から「部外秘」として刊行されつつ敗戦後は長らく所在不明とされていた「大正三四年戦役海軍衛生史」の発掘によって，新たに判明した八幡丸の艤装状況・人員配置・搭載医療資器材・診療記録などを踏まえ，病院船八幡丸の医療史的意義について考察する．

八幡丸は，明治31年に英国で建造された，総トン数3817トン（載貨喫水排水量6990トン），長さ382尺05，幅43尺10，乾舷5尺44の貨客船であった．当時は豪州航路や上海航路に従事していたが，神戸に停泊中の8月20日に病院船として指定され，呉鎮守府所管で第2艦隊附属となった．対独宣戦布告に先立つ8月21日に開始された病院船への艤装は呉海軍工廠で行われ，9月9日に艤装を完了．呉における20日足らずの艤装では，「ジェネヴァ条約の原則を海戦に応用する海牙条約」（1907年）に準じた船体塗装の他，7病室（戦傷，外科，内科，伝染病室，隔離室，癲狂室，士官病室：各1室）237床の入院設備，製氷機，患者収容装置，清水槽などが設置され，医療資器材が搭載された．軍医長（当時の海軍病院長に相当）には軍医大監（自衛隊では1等海佐に相当）西勇雄が着任し，呉鎮守府の軍医中監（同2等海佐相当）服部清一から艤装監督を引き継いだ．医療従事者としては，軍医（軍医長を含む）8人，薬剤士2人，看護要員49人（看護師1名，看護手8人，看護20人，雇看病夫20人）が配置された．

9月13日に呉を出港後，青島陥落までに山東半島と佐世保との間を3回往復．その間，患者311名（陸軍3名，英国海軍2名を含む）を収容加療し，256名を内地へ搬送した．山東半島では，青島攻略戦に伴う戦傷患者23名の他，多数の赤痢患者が発生した為，当初は7病室の内の1室（16床）のみであった伝染病区画は3室（88床）まで拡張された．青島陥落の後は横須賀鎮守府に転属となり，日本海軍病院船としては初めて赤道を越えてフィジーまで進出した．南洋行動では内科疾患を中心とする患者104名を収容し，この内101名を横須賀へ搬送した．

神戸丸，西京丸が日本近海での行動に止まったのに対し，八幡丸は日本海軍で初めて南半球まで進出した病院船となった．但し病院船としての艤装は日露戦役当時の神戸丸を基準に行われていたため，現場では少なからぬ不具合が露呈した．八幡丸解傭後に西勇雄元軍医長は，大は船体構造から小は職名に至るまで，将来の病院船が備えるべき要素について率直かつ詳細に記した20頁以上に及ぶ意見書を提出し，特設艦船部隊令の改正（大正8年）や，笠戸丸以降の病院船艤装の近代化に寄与した．